

令和 6 年度

比較文化研究所
特別研究員 B
研究発表会

会 場

久留米大学 御井学舎 御井本館 4 階
140 教室

日 時

令和 7 年 2 月 21 日 (金)
10:00～11:20



令和6年度 比較文化研究所 特別研究員B研究発表会
(R07.2.21)
プログラム

-
- | | |
|---------|-------------|
| 1. 開会挨拶 | 10:00~10:15 |
| 2. 研究発表 | 10:15~11:05 |
| 3. 閉会挨拶 | 11:05~11:20 |
-

研究発表

(御井本館 4 階 140 教室)

座長：原口 雅浩 時間・ベル：山下 聡子

<発 表 演 題>

No.	時 間	発表者
1	10:15~10:40	天満 翔
自閉スペクトラム症児のロールシャッハ・テストの特徴		
2	10:40~11:05	池田 博章
地域社会における一人暮らし後期高齢者の交流状況が日常不安と相談先に与える影響		

自閉スペクトラム症児のロールシャッハ・テストの特徴

ーこれまでの研究のまとめー

天満 翔（久留米大学）

キーワード：自閉スペクトラム症，学童期，ロールシャッハ・テスト

I. 問題

自閉スペクトラム症（以下，ASD）とは，社会的コミュニケーションおよび対人相互的反応の障害，興味に限局と常同的・反復的行動を主徴とした，乳幼児期に発現する精神発達の障害である（American Psychiatric Association, 2022；高橋・大野訳，2023）。ロールシャッハ・テスト（以下，ロ・テスト）もまた，主に 2000 年以降そのアセスメントの可能性を検証してきた。これまでの ASD のロールシャッハ研究から分かることはスコアから捉えられる基本的特性，コミュニケーションの型，図版の形態把握の仕方の 3 点に要約される（天満，2023）。しかし，その主な対象は青年期や成人期を対象としたものが多く，学童期においては独自の検討が必要であると考えられる。そこで，本研究の目的は，これまで積み重ねられてきた知見と有用性を以って，学童期 ASD の特性の理解と支援を検討することである。

II. 方法

参加者は，児童精神科医師により ASD と診断され，1 名以上の臨床心理士が診断の確認を行った児童生徒である。服薬の有無に関しては条件としておらず，ロ・テストは研究の一環として行われたため筆者とは支援関係はない。以上を踏まえて，量的分析（参加者 15 名（男子 13 名，女子 2 名）， 10.55 ± 1.92 歳， $IQ97.33 \pm 14.40$ ），質的分析（参加者 15 名（男子 13 名，女子 2 名）， 10.27 ± 1.67 歳， $IQ96.13 \pm 14.01$ ），縦断的分析（参加者 7 名（男児 6 名，女児 1 名），1 回目実施時 9.86 ± 2.41 歳，2 回目実施時 13.57 ± 2.70 歳， $IQ98.57 \pm 13.88$ ）の 3 点から実証的研究を行った。なお，実施法ならびに結果の解釈は片口法に準拠している。

III. 結果と考察

量的分析では行動質問票との相関から，新規場面での適応の弱さ，反抗的態度，杓子定規な考え方，対人関係を築くことの困難さ，反応の幼さ，現実的生活への積極的関心に乏しく他者との情緒的交流の困難さなどが明らかとなった。学童期であっても，特に ASD 傾向が高くなるとスコア上は青年期・成人期と同様の特徴を示す可能性が示唆された。しかし，青年期・成人期と異なり ASD 傾向が高いと ΣC が多い傾向にあることや Card Select から情緒的な統制の弱さも窺えた。

質的分析ではコレスポンデンス分析の結果から，恣意的操作，個人的体験の挿入，曖昧な反応が中核的な特徴として挙げられ，作話傾向反応，イメージの専有，作話的結合反応，反復反応が周辺的な特徴として挙げられた。中核的な特徴として，基本的な形態把握の未熟さがあり，反応を産出するにあたって恣意的な操作が伴ったり自身の体験を挿入したりする過程が示唆された。また，それに続く周辺的な特徴としてファンタジーや誇張など過度に話が飛躍したり同じ反応を何度も繰り返したりすることが示唆された。

縦断的分析では同一個人内のスコアを比較した結果から，反応領域において全体反応の増加傾向と部分

反応の減少傾向がみられた。その一方で、形態水準、M 反応、P 反応では有意差がみられなかったことから発達停滞が窺えた。また、事例においては、優良な形態水準を伴わない融合的大域的把握をベースとした共通特性があることが確認されたが、同時に ASD ならではの可塑性も持っている可能性が明らかとなった。

今回の結果では、量的研究、質的研究、縦断的研究、いずれの研究においても共通して形態把握の未熟さが随所に示された。学童期 ASD のロールシャッハ反応の特徴の 1 つとして、定型発達と同様に年齢による認知発達に伴ってインクプロット全体を捉えるようにはなるが、形態把握の未熟さから良形態の全体反応には至っていないことが窺え、ASD の認知的特性として全体的統合の弱さ (Frith, 2003 ; 冨田・清水・鈴木訳, 2009) が示されていたと考えられる。ロ・テストは元来このような知覚・認知過程に焦点を当てた検査である (Rorschach, 1921 ; 片口訳, 1976)。ロ・テストの原点に立ち返る意味でも、ASD 特有の認知的特性に対して知覚と統覚の検査であるロ・テストをアセスメントツールとして用いることは有用であると考えられる。

地域社会における一人暮らし後期高齢者の交流状況が

日常不安と相談先に与える影響

池田 博章（久留米大学比較文化研究所）

キーワード：一人暮らし後期高齢者，地域（近所）との交流，日常不安，相談先

I. 研究目的

我が国では少子高齢化に伴い，年少人口の減少，一人暮らし高齢者の増加といった社会問題がさらに顕在化している状況にある．本研究では，一人暮らし後期高齢者の地域社会における交流状況が日常の不安と相談先に及ぼす影響を検討することを目的にした．そして，「高齢者の地域（近所）との交流状況は，①『日常で不安に感じていること』（以下，日常不安）と②『日常生活で困った場合の相談先』（以下，相談先）の双方に対して影響する」という仮説を立て，後期高齢者の割合や地理的条件が似た 2 つの日常生活圏域（H 圏域と K 圏域）の比較により検証した．

II. 研究方法

データの出所と調査方法について，社会福祉法人久留米市社会福祉協議会が実施主体となって第 8 期に行われた「令和 3 年度久留米市在宅高齢者基礎調査」で得られた H 圏域と K 圏域の一人暮らし後期高齢者に関する調査データを本研究で使用した．同調査の調査期間は 2021 年 10 月 16 日～12 月 15 日である．調査対象者は，久留米市内に現に居住する 75 歳以上の一人暮らし高齢者及び高齢者のみの世帯である．調査方法について，原則，住民基本台帳の情報をもとにした全数調査とし，民生委員児童委員（以下，民生委員）による調査対象者への訪問留め置き調査および訪問聞き取り調査が実施された．なお，一人暮らし後期高齢者の調査状況について，対象者数 14,492 人（住民基本台帳データによる）のうち施設入所者や調査の回答拒否者等を除いた 6,628 人（実施率 45.7%）から回答が得られている．そのうち，H 圏域 322 人，K 圏域 436 人の計 758 人のデータを本研究で使用した．

次に，基礎統計量，クロス集計および統計的検定には，IBM SPSS Statistics Version 28 を使用した．分析は各項目において欠損値のない回答のみを有効とし，Fisher の正確確率検定（直接確率検定）および Mann-Whitney の U 検定の有意水準は 5% とした．

また，倫理的配慮について，第一に，実施主体の久留米市社会福祉協議会から「令和 3 年度久留米市在宅高齢者基礎調査」の出典を明示することにより，データ使用の許可を得た．第二に，本研究で使用するデータは回答者の個人情報（氏名や住所等）を削除した匿名化データを使用している．第三に，本研究の分析結果は日常生活圏域別に統計処理を行っているため，個人が特定される情報は含まれていない．

III. 結果

まず，圏域×近所との交流状況のクロス結果について，H 圏域は「親しい友人がいる」182 人（56.9%），「あいさつをする程度等」138 人（43.1%）であった．一方，K 圏域は「親しい友人がいる」242 人（56.0%），「あいさつをする程度等」190 人（44.0%）であった．圏域と近所との交流状況の間に有意な関連は認められなかった．性別×圏域×近所との交流状況の 3 重クロス集計の結果においても，性別における圏域と近

所との交流状況の間に有意な関連は認められなかった。

次に、日常不安と相談先の回答数（複数回答）、近所との交流状況との分析結果について、H 圏域の日常不安の合計数（平均値）は「親しい友人がいる」122（0.67）、「あいさつをする程度等」128（0.93）であり、2 群間の有意差が認められた（ $p<0.05$ ）。K 圏域の相談先の合計数（平均値）は「親しい友人がいる」382（1.58）、「あいさつをする程度等」252（1.33）であり、2 群間の有意差が認められた（ $p<0.01$ ）。つまり、「近所に親しい友人がいる」と回答した対象者について、H 圏域の対象者は日常において不安と感じる事柄が少ない傾向があり、一方の K 圏域の対象者は日常生活で困った場合の相談先が多い傾向があった。

IV. 結論

対象者の近所との交流状況について、H 圏域の日常不安の回答数のみ 2 群間に有意差が認められ、K 圏域の相談先の回答数のみ 2 群間に有意差が認められた。したがって、親しい友人の有無などの地域（近所）との交流状況が日常不安または相談先に影響すると考えられる。特に、地域（近所）との交流状況が乏しい一人暮らし高齢者に対しては、健康や介護の不安などの状態に応じて、親族＋知人・地域包括支援センター・民生委員などの相談先の選択肢を増やす支援についても考える必要がある。研究の課題について、本結果の一般化に課題がある。本結果を適用できる範囲について異なる時期や地域での分析を通じて検討していく必要がある。

令和 6 年度

比較文化研究所
研究員研究発表会

会 場

久留米大学 御井学舎 御井本館 4 階

140 教室

日 時

令和 7 年 2 月 21 日 (金)

14:00～16:35

令和6年度 比較文化研究所 研究員研究発表会 (R07.2.21)
プログラム

1. 開会挨拶 14:00~14:15
2. 研究発表 14:15~16:20
3. 閉会挨拶 16:20~16:35

研究発表

(御井本館 4 階 140 教室)

座長：原口 雅浩 時間・ベル：山下 聡子

<発 表 演 題>

No.	時 間	発表者
1	14:15~14:40	三橋 優介
介護支援専門員の地域の社会資源との連携における現状と課題 ー管理者へのアンケート調査からー		
2	14:40~15:05	小田村 悠希
障害者支援施設における生活支援員のキャリア形成について ー文献検討からみる研究動向ー		
3	15:05~15:30	許 東升
中国の都市部における認知症高齢者のコミュニティーケアの現状と課題 ーコミュニティーケアシステムの構築を目指すー		
4	15:30~15:55	永吉 守
大牟田・荒尾におけるユンヌンチュ・エスニシティ ー大牟田「大蛇山・一万人の総踊り」参加と奥都城大祭ー		
5	15:55~16:20	ガーダ・アブディルカリーム
アラブ現代詩と日本現代詩に於けるプロレタリア詩 ーアル・アダーブグループの詩と列島グループの詩を中心にー		

介護支援専門員の地域の社会資源との連携における現状と課題

ー管理者へのアンケート調査からー

三橋 優介（久留米大学比較文化研究所）

キーワード 介護支援専門員 地域包括ケアシステム 地域連携

I. 緒言

地域包括ケア研究会は、地域包括ケアシステムを構築するための課題の一つとして「在宅での日常生活」を支える多職種連携を掲げている。そして、介護保険の根幹であるケアマネジメントは介護支援専門員が担っており、現任者の資質向上を目的として、体系化された研修が実施されている。また、主任介護支援専門員研修では「事業所や地域の介護支援専門員の資質向上を目指し、指導に必要な知識や技術を身につけ指導力を向上させるとともに、自らの実践や介護支援専門員の指導を通じて地域づくりに参画する」ことが規定されている。

2018年度の介護報酬改定において、居宅介護支援事業所（以下、事業所という）の管理者は主任介護支援専門員であることが定められ、利用者への支援、事業所の運営、事業所内の介護支援専門員への支援・指導等、多くの役割が求められている。そのため、事業所の管理者である介護支援専門員による多様な社会資源との連携について、その現状と課題を検討することで、多くの役割を担う介護支援専門員が地域包括ケアシステムの構築に必要な諸条件を提示ことにつながると考える。

本研究の目的は、事業所の管理者である介護支援専門員の地域の社会資源との連携における現状と課題を検討することである。

II. 研究方法

1. 調査対象及び調査方法

調査対象は熊本県の事業所に所属している管理者であり、質問紙による郵送調査を行った。選出にあたってはWAM-NETを参照し、該当する全680の事業所に対し調査票を送付した。調査期間は令和5年10月1日から11月30日までであった。

2. 倫理的配慮

調査対象者には本研究の趣旨と目的、個人情報保護、調査結果の公表、研究への参加は自由意志であり、参加しない場合でも何ら不利益を受けない旨を文書にて説明し、十分に倫理的配慮を行ったうえで実施した。本調査は久留米大学研究倫理委員会の承認を得て行った（研究番号477、承認年月日：令和5年7月14日）。

3. 分析方法

本研究は、介護支援専門員の社会資源との連携の実行度と困難度の実態と相互の関係を構造的に分析することにより、地域連携における現状と課題を検討することを目的としている。

地域の社会資源に関する24項目との連携について、実行度は「連携している」「連携していない」各々の割合から指数を求めた。困難度は「難しい」「難しくない」各々の割合から指数を求めた。欠損値については有効回答数から除外した。分析に指数を用いたのは、項目ごとの有効回答数が異なることも考慮した

うえで連携の実行度と困難度を比較するためである。

また、「かかりつけ医」と「病院の地域医療連携室（以下、連携室）」の困難度の指数を比較するため X^2 検定を用いた。さらに、相関係数を推定し、散布図により両者の関係を考察した。分析はSPSS statistics 28を使用し、有意水準を5%未満とした。連携の実行度と困難度の関連性については、両者の指数を用いてPearsonの積率相関分析を行った。

Ⅲ 結果と考察

送付数全680件のうち、有効回答数は282件（回収率41.5%）であった。

24項目の社会資源との連携指数の実行度を x 軸、困難度を y 軸とする散布図を作成した結果、実行度が高く困難度が低いA群、実行度と困難度がともに高いB群、実行度と困難度がともに低いC群、実行度が低く困難度が高いD群の4グループに分類できた。また、相関分析の結果、両者に有意な正の相関（ $r=0.751$ ）が確認された。これにより、連携の実行度が高い項目ほど、困難度が低くなることが示された。

介護サービス事業所の多くは連携の実行度は高く困難度は低いA群に属しており、比較的円滑な連携を取れていることが示唆された。A群の「かかりつけ医」は実行度と困難度の指数の差が最も高値を示しており、「かかりつけ医」と「連携室」の困難度を X^2 検定を用いて比較した。その結果、「連携室」は「かかりつけ医」よりも有意に低値を示しており、「連携室」の介入は医療との連携を促進させることが期待できる。

B群は実行度が高いにも関わらず連携に困難を感じている社会資源であり、B群の「民生委員」と「近隣住民」は連携に課題があることが示唆された。また、「近隣住民」は「民生委員」よりも実行度は低値、困難度は高値を示した。「地域住民」は「民生委員」よりもさらにボランティアな関わりとなるため、介護支援専門員が連携する頻度は低くなること、連携した際の困難度が高くなったことが推測された。また、D群の「自治会」は「民生委員」・「近隣住民」よりも高い困難度を示していた。

現在、高齢者の子世代との同居率は低下し、高齢者世帯を支援するためのインフォーマルサポートの重要性は高まっている。自治会の役割は地域によって様々であるが、地域包括ケアシステムの構築のために全国で地域包括支援センターや介護サービス事業所、民生委員等とともに介護予防教室やサロンといった地域のつながりを構築する活動が展開されており、多くの地域で生活を支えるうえでの重要な社会資源となっている。そのため、介護支援専門員がこれらの社会資源との連携を強化するとともに、その体制を構築することが、高齢者の地域生活を支える役割を担うことにつながると考える。

障害者支援施設における生活支援員のキャリア形成について

ー文献検討からみる研究動向ー

小田村 悠希（久留米大学比較文化研究所）

キーワード 障害者支援施設 生活支援員 キャリア形成 文献検討 障害者総合支援法

1. 研究背景と目的

障害を有する方に対し、在宅及び施設生活を営むために必要なサービスを提供する根拠法として、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（以下、障害者総合支援法）がある。障害者総合支援法に定められた障害福祉サービスは多岐にわたり、居宅介護事業や計画相談支援事業、施設入所支援や共同生活援助事業などが例として挙げられる。

筆者は現在、生活支援員として、主に知的障害者を対象にした施設入所支援及び日中活動の支援を行っている。生活支援員は入所あるいは通所されている障害当事者が日常生活を営む上で必要な支援を提供することが主な業務¹⁾であるが、生活支援員は必要となる資格や経験が法的には定められていない。そのため、生活支援員として勤務するなかで、どのようなキャリア形成が考えられるのかが明らかになっていない状態である。

本研究は、施設入所支援を展開している障害者支援施設で勤務している生活支援員に焦点をあて、そのキャリア形成に関する文献検索を行った上で、研究動向の把握及び考察を行うことを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、文献研究を主としている。具体的には、国立情報学研究所が提供している「CiNii Research」を使用し、文献の検索及び検討を行う。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理規定をもとに実施している。

4. 結果および考察

まず、CiNii Research で「障害者支援施設 生活支援員」で文献検索を試みると、34 件がヒットした（2025 年 2 月 10 日時点）。しかし、ヒットした文献の中に生活支援員のキャリア形成を研究テーマとした文献は見当たらなかった。ヒットした文献を概観すると、自閉スペクトラム症者（自閉症者を含む）に関する研究が目立つ結果であった。その他、「障害者支援施設 キャリア」で検索を試みると 1 件がヒットするも、本研究の趣旨に合致した研究ではなかった。

このことから、特定の疾患に関する支援方法などに焦点をあてた研究が多いが、一方で、生活支援員のキャリア形成に焦点をあてた研究は該当しなかった。

5. まとめ

生活支援員については、上記で述べたとおり、必要な資格や経験が定められていないため、入職時点で

福祉の経験や資格を有していない方も少なくない。そのため、生活支援員として勤務し、実務経験を重ねる中で、福祉系の資格の取得をすることも多く、キャリアの積み重ね方にも多様なルートが存在すると考えられる。

先行研究では、生活支援員のキャリア形成について取り扱った研究がみられなかったため、関連するテーマも含めた文献などの探索が引き続き必要であることや、具体的な研究手法について検討する必要性が明らかとなった。

6. 参考文献

- 1) WAM NET（ワムネット）「生活支援員」(https://www.wam.go.jp/content/wamnet/pcpub/top/fukushiworkguide/jobguidejobtype/jobguide_job21.html)（最終アクセス日：2025 年 2 月 10 日）

中国の都市部における認知症高齢者のコミュニティケアの現状と課題 コミュニティケアシステムの構築を目指す

許 東升 ((久留米大学比較文化研究所)

キーワード 中国 都市部 認知症高齢者 コミュニティケア

I. 研究の背景と目的

人口大国の中国における高齢化の進展にともない、認知症高齢者も急増している。また中国にける 60 歳以上の高齢者人口の認知症の発症率は約 6% で、軽度認知障害 (MCI) の発症率は約 15.5% と推定されている⁽¹⁾。つまり、中国における高齢者の認知症問題が大きな社会的な課題となっている。一方、中国政府は「90 7 3」(90%は在宅生活、7%がコミュニティサービスを利用しながら在宅生活、3%が高齢者施設で生活)を提唱しているが、国や地方政府が認知症に関する支援や政策が整っていない現状である。

そこで、本研究は認知症高齢者がよりよい地域生活を実現するために、コミュニティケアシステム構築のあり方を探究することを目的とした。

II. 研究方法

本研究は、文献研究である。今後も継続的に、中国において実現可能なコミュニティケアシステムの構築を探究するための基盤研究として位置付けている。

III. 結果

中国における、コミュニティケアの普及が遅れており⁽²⁾、コミュニティ住民の認知症への理解不足により、認知症の人に対し、著しく偏見と差別を存在している⁽³⁾。一方、家族介護者自身を認知症への理解不足や社会からの支援を得られないことより深刻な介護負担を生じており介護虐待を発生する可能性が高い⁽⁴⁾等、認知症高齢者およびその家族者が不利な社会および家族環境に置かれている現状が明らかにしている。

一方、高齢者の認知症問題を緩和するため、上海等の経済先進都市が認知症高齢者にやさしいコミュニティづくりを先駆的に実施している。その具体的な取組として、コミュニティ住民に対する認知症への理解を深めるための普及・啓発、高齢者の認知症を早期発見するためのスクリーニング検査等を中心に展開しているが、認知症ケア専門人材が不足し、サービスの受給者は一般の高齢者および要介護高齢者を中心にし、認知症高齢者および家族介護者に対するケアサービスの提供と支援が不足する等の現状を明らかにした。

IV. 考察

中国における、高齢者の認知症問題が深刻化になっている状況の中で、認知症高齢者がよりよいコミュニティ生活を実現するために、認知症ケア専門人材を育成し、コミュニティケア体制を構築することが急務である。

また、認知症高齢者の地域生活を地域全体で支えるため、認知症にやさしいコミュニティづくりを全

国的に展開することが望まれる。一方、認知症の人と家族の会のような、家族介護者を集まり、意見交換や悩み相談の場を提供し、認知症カフェのような認知症高齢者の社会参加機会の提供や本人ミーティングのような認知症高齢者本人とその家族の視点を重視する施策の策定等が認知症高齢者にやさしいコミュニティづくりを推進していくことが必要であると考えられる。

V. 参考文献

- (1)Longfei J, Du Y, Chu L, et al. (2020). Prevalence, risk factors, and management of dementia and mild cognitive impairment in adults aged 60 years or older in China: a cross-sectional study, The Lancet Public Health, 5(12), 661-671.
- (2)張欣欣(2013)「我国社区养老的现状及其存在问题」『東方企業文化』6:170.
- (3)方文莉・郑宏・张敏敏・ほか(2010)「痴呆知晓率与态度的社区调查」『老年医学与保健』6(4):237-240, 244.
- (4)贺小品・贺清明(2022)「老年痴呆患者的家庭照顾者虐待倾向的研究进展」『临床医学进展』12(9):8655-8661.

大牟田・荒尾におけるユンヌンチュ・エスニシティ
ー大牟田「大蛇山・一万人の総踊り」参加と奥都城大祭ー
永吉 守（久留米大学比較文化研究所、久留米大学医学部・西南学院大学・
福岡県立大学・久留米高専等非常勤講師）

キーワード エスニシティ、与論島、三池炭鉱

I. 緒言

本発表は、福岡県大牟田市在住かつ研究フィールドにしている発表者が、大牟田・荒尾を中心に存在した三池炭鉱(1997 年閉山)の歴史的過程の中で生じた与論島からの移住者とその末裔(自称「ユンヌンチュ」=与論の人という意味、以下「ユンヌンチュ」を使用)がどのような経緯で移住・定住するようになったかという経緯を文献研究し、提示するものである。また、ユンヌンチュ・エスニシティの一端をユンヌンチュの拠り所となっている奥都城の例大祭の宴席余興における三味線・舞踊といった芸能や、エスニック・アイデンティティの表現として大牟田市内で毎年 7 月に開催される「大蛇山」という都市祭礼の中で開催される「一万人の総踊り」に「大牟田・荒尾地区与論会」として参加し続けていることを提示するものである。

II. 研究方法

本研究は、久留米大学比較文化研究所研究員の一環として、文献研究と現地での参与観察およびインタビュー調査によるものである。なお、本発表では過去に研究した内容も一部含まれるが、近年の動向も含めて研究したものである。

III. 結果

まず、ユンヌンチュの移住過程について述べる。与論島は、沖縄本島北端の北方約 20km に存在する鹿児島県最南端の島で、奄美群島の一部であるとともに、琉球弧を形成する一島でもある。したがって、有史以来、ヤマト(日本)・琉球(沖縄)・中国という三つの支配勢力の力関係の中に与論島は存在し、また、自然環境としても強い勢力の台風が常襲する地域の一つである。1898(明治 31)年に与論島や沖縄は甚大な台風被害に見舞われ、「被災地」となり、人々の生活が究極的に厳しくなった。また、大牟田・荒尾を中心に存在した三池炭鉱では、1900 年前後には近代型の坑口・坑内施設および揚炭の蒸気動力化によって石炭を増産する計画を実行しつつあった。当時は三池炭鉱の石炭は川の河口から長崎県島原半島南端の口之津港まで小型船を連ねて海上輸送し、口之津港で英国などの外国船籍の船に積み替えて主に香港・上海などの市場に輸出されていた。そして、与論島の台風被害と口之津での石炭の大型船への積み替えといった港湾労働力需要が重なり、与論島民の一部が 1899 年に移住することになった。1908 年、大牟田に三池港が築港され、口之津での労働は衰退したが、その経緯から 1910 年、ユンヌンチュは当時口之津での人口約 1,200 人のうち 428 名が大牟田・荒尾に再移住することになり、主に地上での貨車による石炭運搬や港湾労働に従事していくことになる。

次に、大牟田・荒尾でのユンヌンチュの状況であるが、1890 年代に与論島で経験した飢餓的な状況や

1900年代に口之津や大牟田・荒尾で経験した劣悪な環境から徐々に改善したものの、貧困な生活を強いられていたものが多く、また大牟田・荒尾の本土住民からの差別が存在していた。ユンヌンチュはこの差別を「誠うちじゃしより」精神や本土と異なる身体動作や慣習を生活改善運動によって改める、といった努力でそれらの差別をはね返してきたとともに、三味線や舞踊によって団結し、ストレスを発散し、団結してきたのである。その団結の核となるのが奥洲奥都城と呼ばれる共同納骨堂で1947年に建設され、それ以前からあるユンヌンチュの互助組織である奥洲同志会は奥洲奥都城会に改められ、1977年からは大牟田・荒尾地区与論会となった。そのような中で、次第に港湾労働から炭鉱の坑内で労働したり、土木建築や商売で自営を始めたたりする者も出現し、また世代を経るごとに新たな職種へと従事する傾向がみられた。

IV. 考察

1960年の三池争議、1963年の炭じん爆発事故を経て、三池炭鉱は1970年代以降、国の石炭政策や海外炭の価格攻勢等の問題から衰退の一途をたどっており、坑口や社宅の縮小が相次ぎ、1997年の閉山へと向かった。1986年には、ユンヌンチュの港湾労働者向けに提供されていた新港町社宅も閉鎖となり、濃密なユンヌンチュ・コミュニティは薄れていくとともに、三味線や舞踊、あるいは与論の言葉もごく一部の人々のものになりつつある。しかしながら、大牟田・荒尾地区与論会では、年2回の奥都城例大祭、盆・正月行事に加え、口之津移住100周年(1998年)、三池(大牟田・荒尾)移住100周年(2010年)と記念行事を実施し、記念行事ごとに三味線や舞踊を復興させてきた。また、2000年代半ばより、大牟田の市民祭りである「大蛇山」の「一万人の総踊り」に「大牟田・荒尾地区与論会」として出場し、独自の法被姿で(年によってはその一部が子どもエイサー隊を組織して)出場を続けている。ここに、大牟田・荒尾に定住するユンヌンチュのエスニシティをみることができる。

<参考文献>

大牟田・荒尾地区与論会(編著)『与論から口之津へ、そして三池へ』1998年。ほか

アラブ現代詩と日本現代詩に於けるプロレタリア詩 ーアル・アダーブグループの詩と列島グループの詩を中心にー

Ghada Abdelkareem (久留米大学比較文化研究所)

キーワード：アラブ現代詩 日本現代詩 プロレタリア詩 アル・アダーブグループ 列島グループ

1. 緒言・目的

第二次世界大戦後、意識を目覚めさせることを期待して、アラブと日本の詩人達は、社会、そしてより広い範囲で当時の人間の状態についてのビジョンを表現する詩を作成しようとした。その時期に、日本現代詩の列島グループとアラブ現代詩のアル・アダーブグループが生まれた。両方のグループが詩を通して、それぞれの社会を形成とする負担を担った。列島グループとアル・アダーブグループの詩と批評で、社会における詩の役割は集中的な議論の話題だった。モダニズム運動の相続人としての両グループは、個人の自由と詩の社会的な機能が中心的な議論だった。両グループは、詩が社会的な意識の再構築に積極的な役割を果たさなければならぬと強調した。本研究では、当時の社会的なイデオロギーに対するそれぞれのグループの立場を追究して、両グループが求めた詩とその社会的な役割を検討する。

2. 研究方法

1. 文献調査

インターネット上、久留米大学御井図書館、国立国会図書館、(エジプト、アラブ諸国) から様々な資料

2. 作品「詩」の翻訳と分析

本論に使用する詩、アラビア語から日本語への翻訳は筆者作成になる。

3. 学会発表 本論は (カイロ大学文学部日本語日本文学科創立 50 周年記念シンポジウム 2025 年 2 月 23 日、学会発表予定)。論文投稿に関しては、カイロ大学文学部・日本研究センター雑誌への投稿を目指す。

3. 考察・結論

アラブ現代詩は、アラブ諸国における汎アラブ主義の社会的及び政治的な集中化とともに現れた。当時、独立国家の発足を支援するのに、社会的及び文学的な努力を行う必要があった。国家主義や政治活動の影響とジャン・ポール・サルトル (1905-1980) の実存主義哲学の顕著な影響で、コミットメント文学がアラブ世界に支配的な流れになった。国家主義の愛着心と親近感によって、個人が社会的枠組みに夢中になった。

国家及び国民に対する作家の責任は 1920 年代初頭のアラブ諸国の独立闘争時代に文学者と社会主義者によって強調された。アラブ世界でコミットメント文学は、国造り中の数十年の間に文芸評論の議論の中心になり、社会主義と実存主義と密接に関連していた。

1953 年にベイルートで創刊され、アラブ世界のほぼ全域に配布されたアラブ文芸雑誌 *al-'adāb* 『アル・アダーブ』誌は、ジャン・ポール・サルトルのアンガージュマンの考えに基づいて、コミットメントを解釈した。『アル・アダーブ』誌は、レバノン、シリア、エジプト、イラク、ヨルダンの左派とナショナリストの文学界に共通のコミュニティを立ち上げることに成功して、「コミットメント (Iltizām)」と「コミッ

トメント文学(al-'adab al-Multazim)」を伝播させて、アラブ世界のポストコロニアル時代の文学的なスローガンになった。

解放革命運動に溢れていた形成期の 1950 年代にアラブ世界では、国家的、政治的そして社会的なアイデンティティの探求の一環として、文学にも幅広い混乱が生じた。この時期、アル・アダーブグループは設立され、アラブ現代詩に大きな役割を果たした。

日本現代詩を代表する列島グループは、団体の概念を中心としていた。この団体は、社会階級の連帯という意味だけではなく、地域コミュニティにまで広がると理解されていた。列島グループの詩は、芸術の自律性の概念を導入することによってプロレタリア詩を改革した。

日本及びアラブ世界における戦争や独立運動の大きな変化の後、社会的イデオロギーが人の共通想像を支配する傾向があった。本研究で、双方グループを比較して、当時の社会的なイデオロギーに対する双方グループの立場を追究して、両グループが求めた詩とその社会的な役割を検討する。